
不思議なリンゴ

勝目博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議なリンゴ

【Nコード】

N7962D

【作者名】

勝目博

【あらすじ】

親友から恋を聞かされ、人肌脱ごうとしたのだが……。

「ねえ、ネットの恋愛って、成立するかな？」

帰り道、友だちの唯が唐突に話しかけた。卒業までの僅かな休息日。直ぐに忙しい大学生活が待っている。それまで唯とも会える僅かな時間。

「どうしたの急に？」

「実は、好きな人が出来たの」

唯からそんな話が出るとは思いもしなかった私は、大声で叫んでしまった。

「良かったじゃない！」

「でも、ネットの上だけなんだ」

「相手の人は？」

「ふふ…、そこは、両思いですよ」

「やったじゃない」

「ねえ、どうしたら良いかな」

恋愛経験の無い唯は、次の取るべき行動が思いつかないようだった。かと言って私だって

詳しくは知らないし、彼氏だって居ないのだ。それでも聞き覚えの答えを伝えた。

「そうね。ゆっくりと愛を確認してから、会うべきね」

「そう思う？ やっぱりそうか」

おくての唯が恋をした。それだけでも私は嬉しかった。唯とは小学校以来の親友だが、

恥ずかしがりやの唯から、初めてそんなことを聞かされた。

中学時代も私には唯の抱く恋心が分かったが、本人はずっと否定し続け、

その恋が実ることも無かった。

「明日で最後だね。じゃあ、また明日」

そう言つて駆け出す唯の制服が、私には眩しく見えた。

部活は既にOG扱い。それでも最後は、三年間慣れ親しんだコートに立っていたかった。

内向的な唯に比べ、私はネットには、はまり込んでいなかった。そんな唯が恋をした。

私は興味を持つて、夕食後にネットに繋いで見た。やらない訳ではないが、

私は家族と一緒にテレビを見て、話をするほうが好きだった。

そんな時、唯の話して刺激を受けたのか、その晩遅くまでネットの中を彷徨い続けた。

「どうしたの？」

コートのネット脇で唯が尋ねた。

「ちよつと寝不足みたい」

自分でも目が赤いのは分かっていた。

「何していたの珍しい……」

「ちよつとね……でも面白いものを見つけたわ」

一瞬、戸惑ったが、唯のためになるのかも、と教える気持ちになつていた。

「え？なに、教えてよ」

「あとでね」

私はそう言つて、トスを上げた。

「さあ、教えて。アイスクリームを奢ったんだから」

私達は帰りにファーストフードの店に立ち寄った。最後に涙する後輩達には悪いが、

私たちには進むべき道があった。泣いてしまふかとも思ったが、非情にも涙は流れなかった。唯も同じだった。進む道こそ離れてしまふが、

唯は自分の夢に向けた専門学校への進学が決まっていた。

「秘密のリング、って知ってる？」

「なあに、それ」

唯は目を丸くして答えた。

「昨日、見たんだけど。本当に愛し合ってるのなら、そのリンゴに願いを込めるんだって」

「あんだ、それで寝不足だったの？」

呆れた顔の唯は、半ば怒っているようにも見えた。

「まあね、唯に刺激されちゃったかな」

「呆れた……。まあ、良いけど、その話は聞いたこと無いわ」

「何でも、素材の1つらしいけど、そのリンゴを手に入れて、二人の名前を書き込むと、

必ず結ばれるんだって」

私は嘘でも、唯の勇気になるのでは、と思っていた。

「へー。聞いたこと無いけど本当なの？」

「でも、書いた名前のどちらかが死ぬと、リンゴも腐りだして結局は二人とも死ぬんだって」

「都市伝説にも、なりそうも無いわね。聞いたこと無いな」

「そう思っ、ほら、アド控えといた」

と、私はポケットから紙切れを取り出しながら答えた。

「でも、一緒に死ぬるのもロマンチックかもね！怪しいけど、見てみるわ、ありがとう」

それから二週間。旅行やら大学の準備で忙しかった私は、唯との会う時間も無かった。

会ったのは卒業式だった。

「どうしたの疲れてるみたい」

私の驚きの声に反応し、唯は青い顔と精気の無い目で私を見た。

「彼と連絡が取れないの……」

彼とはネットの相手だ。『リンゴを見つけて、彼と二人で名前を入れてわ』

一週間前に唯から連絡があって聞いた話では、彼は隣の県の大学
生。

今度四回生になる。唯が卒業したら会いに行く予定だと、聞いてい

た。

「忙しいのかしら……」

「うん、もう五日も顔を出さないのよ。こんなこと初めて……」
所詮ネットなどそんなものだ、私は思ったが、唯の落ち込みは激しかった。

「きつと旅行か何かじゃない」

「それなら言うはず。それに……」

「どうしたの？」

「うん……、二人のリンゴ、腐り始めたの」

「え？嘘！まじめに？」

「私のブログは知ってるよね。そこに貼り付けたんだけど、一昨日から変なの」

「分かった、今日帰ったら、唯のブログ見てみるから」

「うん、ごめん……」

唯は式の最中に、倒れるのではないかと思われるほど、衰弱して見えた。

そして式が終わると列席していた母親に連れられて、早めに学校をあとにした。

一足早い一人だけの卒業。その夜、卒業パーティも終わりゆつくりとお風呂に浸かり、

遅い時間にネットに繋がった。

唯のブログを見るためだった。絵日記的な唯のブログには、たくさん仲間が集まっていた。

もう、二年以上も継続していた。私も時々顔を出したが、頻繁ではなかった。

ブログのトップページにはリンゴの飾りが貼り付けられていたが、別に変わったところは無かった。私は唯のブログを隅々まで開き、寄せられるコメントにも目を通した。そこで一人の男の書き込みが目にとまった。

優しい言葉で唯を励ますその男のコメントは、五日前でぶつとりと

途切れていた。

『この人が唯の彼氏ね』などと考えていると、階段の下で母が大きな声で叫んだ。

「唯ちゃん、死んだって」

私は階段の一番上で崩れるように座り込んだ。母が慌てて駆け上り、私を抱きしめてくれなければ、おそらくしたまで落ちていただろ。

卒業式を途中で切り上げ、一人学校をあとにする唯の後姿が瞼に浮かんだ……。

唯の死後、大学近くのアパートに越す前に私は唯の家を訪れた。暫くは来れないだろうと、

持てる勇気を振り絞って訪れたのだ。

家族は重い空気に包まれていたが、私を快く迎え入れてくれた。

「そうそう、貴方に渡してくれて、手紙を……」

唯の母はそこで涙に言葉を奪われた。しかしその手には、私宛の手紙が握り締められていた。

「ごめんなさい……。受け取ったら、直ぐに見て……と……」

私はその場で封を開けた。内容に目を通して、そして唯の母に尋ねた。

「唯のパソコンお借りします」

私は返事も待たずに唯の部屋に入り込んだ。見慣れた部屋に涙が出そうになったが、

必死で堪えて唯のパソコンに電源を入れた。

命が吹き出すようにパソコンは低い振動と共に動き出した。

手紙には、『私のブログを見て』と、そしてアクセスコードが書かれていた。

ブログに接続した私が見たもの、それは腐ったリンゴの飾りだった。ためにアクセスコードなしで見ると、リンゴは形を崩さずに綺麗な色で載っていた。

唯の彼氏についてはとても調べる気にはなれなかった。

唯のリンゴを見た時点で、容易に想像できたからだ。

私は自分を呪った唯にリンゴを教えたのは、他ならぬ私なのだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7962d/>

不思議なリンゴ

2010年10月13日13時15分発行